

8307 十月末の或る午後、何となくうつろな気持で、・・・

十月末の或る午後、何となくうつろな気持で、プラタナスの枯葉を蹴りながらパリの街を歩いていると、一つの画廊のガラス戸越しに、写真で見覚えのあるジャコメッティの一枚の絵があるのが眼にとまった。僕は戸をおしてなかにはいった。

矢内原伊作『ジャコメッティとともに』

#### [許容訳例]

One afternoon at the end of October, in a somehow hollow mood, walking along a street in Paris kicking at the fallen leaves of the plane trees as I went, when, I happened to notice, through the glass door of an art gallery, a Giacometti picture I remembered seeing in a photograph. I entered, pushing the door open.

#### [翻訳例]

One afternoon at the end of October, I was walking the streets of Paris in a vaguely empty mood, scuffling the fallen leaves of the plane trees as I went, when, through the glass door of an art gallery, I caught sight of a painting by Giacometti that I remembered seeing in a photograph. Pushing the door open, I went inside.

■十月末の或る午後、何となくうつろな気持で、プラタナスの枯葉を蹴りながらパリの街を歩いていると、一つの画廊のガラス戸越しに、写真で見覚えのあるジャコメッティの一枚の絵があるのが眼にとまった。 (8307)

★「十月末の或る午後」は one afternoon at the end of October ですが、他に、one afternoon in late October とか、one afternoon towards the end of October なども使えます。

★「何となくうつろな気持で」は in a vaguely[somehow] empty mood でしょう。「うつろな」は hollow でもいいですが、どちらかと言うと empty とか vacant の方がいいと思います。それからこの場合の「気持」は、主観的な感じ・自分の心の状態を言っているわけですから、feeling ではなく mood とか frame of mind を使った方がいいでしょう。feeling というの普通、何か特定なものに対して起きる気持ちを表します。たとえば、He looked at it with a feeling of disgust.とか、It is a very pleasant feeling to sit in the sun on a summer afternoon. というように使います。また、feeling を動詞に使って feeling vaguely empty[vacant; hollow] とすると、何か‘お腹がすいている’といったようなニュアンスにもとられかねない感じで、ちょっとここで使うのは危険だと思います。それに、feeling を使うと、たとえば、One evening in October, feeling vaguely hungry, I went out to the local restaurant.の場合のように、次に続く {単位情報} の理由になる可能性もあります。

#### ◆定冠詞の感覚

★ 「プラタナスの枯葉」は the leaves of the plane trees とした方がいいでしょう。leaves of

plane trees と無冠詞にすると、たとえば、I walked along a road eating chocolate. と言う場合と同じ感じで、極端に言えば、fallen leaves とか plane trees がはじめからその場にあったかどうかわからない感じになります。つまり、蹴るために自分でわざわざそれを持ってきたのかもしれないということにもなってしまいます。ここはあくまでも自分の周りにある場面の中の一部として fallen leaves や plane trees があるわけですから、どうしても定冠詞 the が必要になります。これは難しい問題ですが非常に重要なことだと思います。

★ 「(プラタナスの枯葉を) 蹴り・・・」ですが、ここは「枯葉」を意識的に「蹴る」というのではなく、「枯葉が多いので歩くとやむをえず蹴ることになる」ということだろうと思います。そうすると kick は使えません。kick の目的語になるのは ball (に相当するもの) で、たとえば、He kicked the ball into the air./ He kicked the ball between the posts. のように使います。でなければ He kicked me. のように人間が目的になります。この日本文の場合は意識的に蹴るわけではありませんし、たとえ意識的にするとしても、kick fallen leaves というと、ボールと同じように一つ一つ前に置いて蹴っているような感じになります。kick を使うなら kick up とすれば、「漠然と・・・に向かって」という感じになりますが、それでもあくまでも意識的な動作には変わりありません。まったく無意識のうちに自然にそうなると言う場合はちょっと難しいのですが、主語を my feet に変えると、kick up でも無意識的な動作という感じがよく出ると思います。また、ここでは scuffle という言葉が使えます。足を引きするような感じで歩く場合に使う言葉です。

● 「ながら」は、ここでは現在分詞で my feet kicking up the fallen leaves…/ scuffling the fallen leaves…で表すことが出来ますが、「ながら」という感じを強めるために文末に as I went を加えたい気がします。つまり、my feet kicking up the fallen leaves…/ scuffling the fallen leaves…だけですと、それが walking the streets … [walking along a street] …の目的語であるような感じになりますが、as I went を入れると、kick up [scuffle] という action が続いて、結果的に walk することになるということがはっきりします。

★ 「パリの街を歩く」は、ここでは walk the streets of Paris と street を複数にした方が「あてもなくあちこち歩く」という感じがでます。たとえば、When I was a student, I often walked the streets of London until twelve o'clock at night thinking about all kinds of things. のような感じと同じです。walk along a street in Paris でも間違いではありませんが、パリのある通りをすたすた歩くという感じで、「何となくうつろな気持で」と合わないように思えます。

### ● [と] (瞬時同時)

「歩いている [と] ・・・した」は I was doing something, when… (・・・していると、・・・) と同じで、「背景（過去進行形）+ 主動作 ((, ) when… )」の形で処理することが出来ます。

★ 「一つの画廊のガラス戸越しに」は through the glass door of an art gallery です。

★ 「写真で」は in the form of a photograph とか as a photograph ということですが、「写真の中で」ということなので in a photograph という表現を使います。たとえば, I know that man's

face. I've seen it in a photograph. のように、なお、「絵という形態で」という感じで In photograph としたくなる気持はわかりますが、必ず不定冠詞 a を入れます。たとえば、in a (certain) photograph that I saw somewhere [that somebody showed me] のように使うのです。

★「見覚えのある」は I remembered seeing…です。ここは I had remembered seeing…と過去完了を使うのは間違いです。つまり remember seeing は「以前見たことを覚えている」ということですから、ここは時制の一致でそのまま過去にすればいいわけです。また、before など入れる必要はありません。

★「ジャコメッティの一枚の絵」は a Giacometti picture[painting] か、a painting[picture] by Giacometti です。なお、a Giacometti's picture[painting] とは言いません。

● 「連体修飾節 + 不定代名詞的体言」(見覚えのあるジャコメッティの一枚の絵)

「見覚えのあるジャコメッティの一枚の絵」は「連体修飾節(見覚えのある) + 不定代名詞的体言(ジャコメッティの一枚の絵)」です。英語では「名詞(a picture[painting] by ~) + 関係詞節(I remembered seeing…))です。「ジャコメッティ」は特定名詞ですが、「一枚の絵(a picture)」は普通名詞です。

★「…があるのが眼にとまつた」と日本語ではよく使いますが「…が目にとまつた」との違いは微妙です。この場合、すぐにジャコメッティの絵だとわかっているということもあり、強いてその違いを英語に出す必要はないと思いますが、「…が目にとまつた」に比べると「…があるのが眼にとまつた」には対象の認識に何となく少し時間・距離があるように感じられます。英語で「あるのが」の部分を表現するには they had を用いればよいと思います。つまり、I saw [I happened to notice] a painting by…とするのではなく I saw they had [I happened to notice that they had] a painting by…とするわけです。

★「～が目にとまつた」は I happened to notice ~ の他に I caught sight of ~ という言い方もできますし、あるいは絵を主語にすれば a picture[painting] caught [happened to catch] my eye とか、a picture[painting] attracted [happened to attract] my attention とも言えます。

■ 僕は戸をおしてなかにはいった。(8307)

★「戸をおす」は push the door ですが、次に「なかにはいった」とありますから push the door open です。

★「なかにはいる」は enter ですが、ちょっとあっけない感じがします。欲を言えば go inside とした方がいいと思います。

● [て] (動作順次)

「僕は戸をおしてなかにはいった」は「…して…した」ですから、「動作順次」で、英語では and で対応できます。I pushed the door open and went inside. ですが、and を使うと、どうしても「そして」という間(ま)が開きます。もっと二つの動作を緊密にするには、ここでは分詞構文を使うといいでしょう。つまり、Pushing the door open, I went inside. です。なお、I went inside[entered], pushing the door open. でも間違いではありません。

んが、これは、まず「中に入った」ということを伝えて、ついでにどうやって入ったかを説明しているような感じになります。一般に「AしてBする」は「主動詞+句」という定型で処理できるのは、「A(理由・説明)して+Bする」の場合と考えておくといいと思います。「犬が迷いこんできた。餌が欲しく〔て〕人に媚びてくるので、捨てられたばかりだとわかった。」→A dog strayed into our place. He fawned on people, seeking food, which showed he had just been abandoned./ The dog came wandering in from nowhere. It made up to people in the hope of getting food, which suggested that it had only just lost its owner.